

## I 時間追跡（等加速度）、剛体のつりあい

### 【メモ】

・問1から問3までは質点の力学。問1はつりあいと滑らない条件。問2は時間追跡\*1。問3は仕事の定義が聞かれている。仕事の計算は3通りに分類できるが、今の場合力の大きさが一定なことから、定義から積分を利用することなく計算できる。

・問4以降は剛体のつりあい。剛体のつりあいは、

$$\begin{cases} \text{各方向の力のつりあい} \\ \text{力のモーメントのつりあい} \end{cases}$$

を連立して考える。ここに滑らない条件など、状況に応じた条件を加えて問題を解く。

### 【解答】

問1 以下全ての箇所静摩擦力の大きさを  $R$ 、垂直抗力の大きさを  $N$  とする。つりあいより、

$$\begin{cases} 0 = mg \sin \theta - R, \\ 0 = N - mg \cos \theta, \end{cases} \quad R = mg \sin \theta, \quad N = mg \cos \theta.$$

滑らない条件を考えて、

$$R < \mu_0 N \\ mg \sin \theta < \mu_0 mg \cos \theta, \quad \therefore \tan \theta_0 = \underline{\underline{\mu_0}}.$$

問2 運動方程式より、

$$\begin{cases} ma = mg \sin \theta' - \mu' N, \\ 0 = N - mg \cos \theta', \end{cases} \quad N = mg \cos \theta', \quad a = g(\sin \theta' - \mu' \cos \theta').$$

$x$  軸を斜面に沿って定め、その原点を頂点 B の初期位置とする。時刻  $t$  における頂点 B の位置を  $x$ 、物体の速度を  $v$  と記す。加速度が一定値を取ることで、

$$\begin{cases} x = \frac{1}{2}at^2, \\ v = at. \end{cases}$$

$x = \frac{h}{\sin \theta'}$  の下で2式を解いて、

$$t = \sqrt{\frac{2h}{a \sin \theta'}} = \sqrt{\frac{2h}{g \sin \theta' (\sin \theta' - \mu' \cos \theta')}} \quad , \quad v = \sqrt{\frac{2ah}{\sin \theta'}} = \sqrt{2gh \left(1 - \frac{\mu'}{\tan \theta'}\right)}.$$

\*1 等加速度なのでエネルギーで考えても解けるが、設問で時刻  $t$  が聞かれているため時間追跡の方法で解く。

問3 仕事の定義より,

$$W_1 = mg \frac{h}{\sin \theta'} \cos(90^\circ - \theta') = \underline{mgh}, \quad W_2 = N \frac{h}{\sin \theta'} \cos(0^\circ) = \underline{0},$$

$$W_3 = \mu' mg \cos \theta' \frac{h}{\sin \theta'} \cos(180^\circ) = \underline{-\frac{\mu' mgh}{\tan \theta'}}.$$

問4 頂点 B と抗力<sup>\*2</sup>の作用点の距離を  $x$  とする. 力のつりあい・力のモーメントのつりあい (B を回転軸) より<sup>\*3</sup>,

$$\begin{cases} 0 = mg \sin \theta - R, \\ 0 = N - mg \cos \theta, \\ 0 = xN + \frac{a}{2} mg \sin \theta - \frac{b}{2} mg \cos \theta. \end{cases}$$

回転を始める瞬間を考えるので,  $x = 0$  の下で 3 式を解けば<sup>\*4</sup>,

$$\tan \theta_1 = \frac{a}{b}.$$

また, このとき ( $x = 0$  のとき, すなわち  $\theta = \theta_1$  のとき) に滑らない条件を考えれば,

$$R < \mu_1 N$$

$$mg \sin \theta_1 < \mu_1 mg \cos \theta_1, \quad \therefore \underline{\tan \theta_1 = \mu_1}.$$

問5 力のつりあい・力のモーメントのつりあい (C を回転軸) より,

$$\begin{cases} 0 = mg \sin \theta_2 - R - F \cos \theta_2, \\ 0 = N - mg \cos \theta_2 - F \sin \theta_2, \\ 0 = -(b-x)N + \frac{a}{2} mg \sin \theta_2 + \frac{b}{2} mg \cos \theta_2 - aF \cos \theta_2 + bF \sin \theta_2. \end{cases}$$

$x = b$  の下で力のモーメントの式を解いて<sup>\*5</sup>,

$$F = \frac{1}{2} \frac{a \sin \theta_2 + b \cos \theta_2}{a \cos \theta_2 - b \sin \theta_2} mg.$$

<sup>\*2</sup> 斜面と垂直な成分が垂直抗力, 斜面と平行な成分が静止摩擦力である.

<sup>\*3</sup> この式から, 回転する直前を考えていないときの抗力の作用点の位置  $x$  を求めることもできる (こういう設問もある).

<sup>\*4</sup>  $N, R$  はともに設問になっていないので求める必要はないが, 仮の求めたくなった場合,  $\cos \theta$  は三角関数の相互関係から,

$$1 + \tan^2 \theta = \frac{1}{\cos^2 \theta}, \quad \therefore \cos \theta = \frac{b}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

と求まり (図より, 正は明らか).  $\sin \theta$  は  $\tan \theta = \frac{\sin \theta}{\cos \theta}$  から求まる. そしてこの値を使えばよい.

<sup>\*5</sup> 分母の符号が正であることは  $\theta_1 > \theta_2$  より,

$$\tan \theta_1 = \frac{a}{b} > \tan \theta_2, \quad \therefore a \cos \theta_2 > b \sin \theta_2$$

と確認できる.

問6 問5より,

$$0 = -(b-x)(mg \cos \theta + F \sin \theta) + \frac{a}{2}mg \sin \theta + \frac{b}{2}mg \cos \theta - aF \cos \theta + bF \sin \theta$$
$$\therefore b-x = \frac{1}{2} \frac{mg}{mg + F \tan \theta} (a \tan \theta + b) - \frac{F}{mg + F \tan \theta} (a - b \tan \theta).$$

以上より,  $b-x$  は  $F > 0$  において単調に増加, または減少する関数である\*<sup>6</sup>. 今,  $F > 0$  の任意の  $F$  において  $b-x$  が正の値であればよく\*<sup>7</sup>,  $F = 0$  において正の値を取ることから  $F \rightarrow \infty$  でも正の値を取ればよい. よって,

$$\lim_{F \rightarrow \infty} (b-x) = -\frac{a-b \tan \theta}{\tan \theta} > 0, \quad \therefore \underbrace{\tan \theta}_{\text{~~~~~}} > \frac{a}{b}.$$

---

\*<sup>6</sup> 分数関数より,  $F = \frac{mg}{\tan \theta}$  を境に単調に増加/減少することは明らかである.

\*<sup>7</sup> 転倒するとき抗力の作用点が C と一致する ( $b-x$  が 0 となる) ことから, 抗力の作用点が C と一致しない ( $b-x$  が正の値を取る) とき転倒しない.



## II 電気回路，内部構造の見えるコンデンサ

【メモ】

- ・問3のみ素子の中身が見える問題で，それ以外は普通の電気回路の問題である．
- ・(そろそろくどい気もするが) 電気回路は

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{キルヒホッフ則} \\ \text{電荷保存則} \\ \text{素子の性質} \end{array} \right.$$

を連立して考える．

【解答】

- 問1 以下全ての箇所ではコンデンサ  $C_1$  に蓄えられる電荷を  $Q_1$ ，コンデンサ  $C_2$  に蓄えられる電荷を  $Q_2$ ，抵抗  $R$  を流れる電流を  $I$  と記す．キルヒホッフ則・電荷保存則より，

$$\left\{ \begin{array}{l} 2E - R \cdot 0 - \frac{Q_1}{C_1} - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \\ -Q_1 + Q_2 = 0, \end{array} \right. \quad \therefore Q_1 = Q_2 = \frac{2C_1 C_2}{C_1 + C_2} E.$$

極板間電位差は，

$$\frac{Q_1}{C_1} = \frac{2C_2}{C_1 + C_2} E.$$

- 問2 キルヒホッフ則より，

$$\left\{ \begin{array}{l} E - R \cdot 0 - \frac{Q_1}{C_1} = 0, \\ E - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \end{array} \right. \quad \therefore Q_1 = C_1 E, \quad Q_2 = C_2 E.$$

よって，問1まで孤立部分だった箇所の電荷を計算すると，

$$-Q_1 + Q_2 = (C_2 - C_1)E > 0$$

より，この部分に正の電荷が  $(C_2 - C_1)E$  だけ流れ込んだことがわかる．よって，電流は  $f$  から  $c$  に流れた．

- 問3 コンデンサを左右に分けて考え，左右の部分の容量をそれぞれ  $C_L$ ， $C_R$  と記す． $C_R$  は  $t = 0$  で  $0$ ， $t = t_0$  で  $3C_2$  となることと，時刻  $t$  に比例することから\*8，

$$C_R = 3C_2 \frac{t}{t_0}.$$

\*8 この議論がわかりにくければ，平行平板コンデンサの容量の公式  $C = \epsilon \frac{S}{d}$  を用いて，例として極板間隔を  $d$ ，面積を  $S = ab$

$C_L$  は  $t=0$  で  $C_2$ ,  $t=t_0$  で 0 となることを踏まえ同様に考えれば,

$$C_L = C_2 \left(1 - \frac{t}{t_0}\right).$$

よって, 時刻  $t$  における  $C_2$  の容量は,

$$C_2(t) = C_R + C_L = C_2 \left(1 + 2\frac{t}{t_0}\right).$$

キルヒホッフ則より,

$$E - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \quad \therefore \frac{dQ_2}{dt} = \frac{dC_2}{dt} E = \frac{2C_2 E}{t_0}.$$

問 4 コンデンサの静電エネルギー変化は,

$$\Delta U = \frac{1}{2} \frac{(3C_2 E)^2}{C_2} - \frac{1}{2} \frac{(3C_2 E)^2}{3C_2} = 3C_2 E^2.$$

系のエネルギー収支より,

$$W_{\text{ex}} = \Delta U = 3C_2 E^2.$$

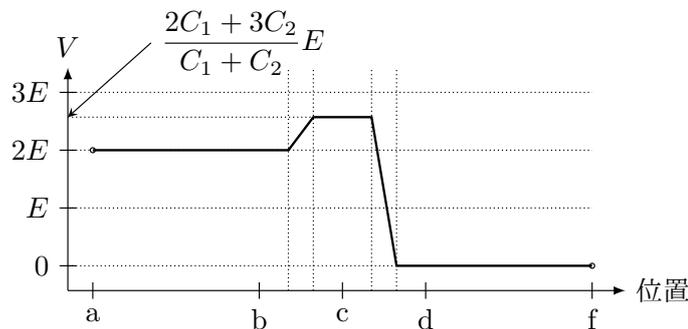
問 5 キルヒホッフ則・電荷保存則より,

$$\begin{cases} 2E - R \cdot 0 - \frac{Q_1}{C_1} - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \\ -Q_1 + Q_2 = 3C_2 E, \end{cases} \quad \therefore Q_1 = -\frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} E, \quad Q_2 = \frac{C_2(2C_1 + 3C_2)}{C_1 + C_2} E.$$

よって, それぞれの極板間電位差は,

$$\frac{|Q_1|}{C_1} = \frac{C_2}{C_1 + C_2} E, \quad \frac{Q_2}{C_2} = \frac{2C_1 + 3C_2}{C_1 + C_2} E.$$

グラフは以下のようなになる\*9.



のように仮定し, 挿入した距離を  $x = vt$  ( $0 \leq x \leq a$ ),  $C_2 = \varepsilon_0 \frac{ab}{d}$ ,  $t_0 = \frac{a}{v}$  とすれば,

$$C_R = 3\varepsilon_0 \frac{bv}{d} t = 3C_2 \frac{t}{t_0}, \quad C_L = \varepsilon_0 \frac{b(a-vt)}{d} = C_2 \left(1 - \frac{t}{t_0}\right).$$

\*9 極板間には平行一様電場が生じているため, 極板間の電位差の傾きは一定となる.

### III 光の干渉

【メモ】

- ・問 1, 問 2 は幾何光学の問題. そのため, 使う物理法則は屈折の法則のみ. 屈折の法則以外には図形の考察を行うが, この問題では角度  $i_0$  と  $r_0$ , 長さ  $d$  が与えられているので, 三角比を用いることになる.
- ・問 3 からは干渉の問題となる. 干渉条件は整数を  $m$  として,

$$(\text{位相差}) = \begin{cases} 2m\pi & (\text{強めあい}), \\ (2m-1)\pi & (\text{弱めあい}). \end{cases}$$

【解答】

問 1 屈折の法則より,

$$\underline{1 \cdot \sin i_0 = n \sin r_0}.$$

問 2 図より,

$$\overline{BD} = 2\overline{BC} \sin r_0 = 2 \frac{d}{\cos r_0} \sin r_0 = 2d \tan r_0.$$

よって,

$$(\text{BG 間の光路長}) = 1 \cdot \overline{BG} = \overline{BD} \sin i_0 = \underline{2d \tan r_0 \sin i_0}.$$

同様にして,

$$(\text{FD 間の光路長}) = n\overline{FD} = n\overline{BD} \cos(90^\circ - r_0) = 2nd \tan r_0 \sin r_0 = \underline{2d \tan r_0 \sin i_0}.$$

問 3 反射による位相のずれを考慮して,

$$\frac{2\pi}{\lambda/n} \cdot 2 \cos r - \pi = (2m+1)\pi, \quad \therefore \underline{\cos r = \frac{\lambda}{2nd}(m+1)}.$$

問 4 両方の経路の光がともに位相反転しているので,

$$\frac{2\pi}{\lambda/n} \cdot 2 \cos r = (2m+1)\pi, \quad \therefore \underline{\cos r = \frac{\lambda}{2nd} \left(m + \frac{1}{2}\right)}.$$

問 5 図より経路差は 0. よって, 位相差も 0.

問 6 圧力が  $P$  のとき, 2 光の位相差  $\Delta\phi$  は,

$$\Delta\phi = \frac{2\pi}{\lambda/n} L - \frac{2\pi}{\lambda/1} L = \frac{2\pi}{\lambda} L(n_1 - 1) \frac{P}{P_1}.$$

$P = P_1$  で強めあい,  $P = 2P_1$  でその後の 50 回目の強めあいより,

$$\begin{cases} \frac{2\pi}{\lambda}L(n_1 - 1) = 2m\pi, \\ \frac{2\pi}{\lambda}L \cdot 2(n_1 - 1) = 2(m + 50)\pi, \end{cases} \quad \therefore m = 50, \quad n_1 = 1 + 50\frac{\lambda}{L}.$$

よって, 与えられた数値を代入して,

$$n_1 - 1 = \frac{5 \times 10^{-7} \text{ m}}{50 \times 10^{-3} \text{ m}} \times 50 = \underline{\underline{5 \times 10^{-4}}}.$$